

第1章

和歌山市水道ビジョン2024の 趣旨と位置づけ

1-1 策定趣旨 02

「和歌山市水道ビジョン」を改定し、「和歌山市水道ビジョン2024」策定の背景と趣旨を示しています。

1-2 位置づけ 03

上位計画と整合を図りつつ、新たに策定した「和歌山市水道ビジョン2024」の位置づけを示しています。

1-1 策定趣旨

和歌山市の水道は、公衆衛生の向上及び防火用水の確保を目的として、大正14年(1925年)に給水を開始しました。その後、戦災や災害を乗り越え、市域の拡大、市勢の発展等による水需要の増加に応えるための拡張及び施設整備を行い、約100年のあいだ市民生活の向上及び都市機能を支える基盤施設としての役割を果たしてきました。

水道ビジョンを策定した平成20年度は、水道の普及率がほぼ100%であったため、拡張から維持管理の時代へと移行しており、高度経済成長期に整備された水道施設の更新を継続的に取り組むなど、安心・安全な水道水を将来にわたって安定して供給し続けることが求められました。

今後は、さらに更新の必要な施設が増大します。また、東日本大震災(平成23年)、熊本地震(平成28年)などの災害経験を踏まえ、南海トラフ地震をはじめとする様々な自然災害に対し、水道の危機管理の観点を含めた施設及び体制の整備が求められます。

特に施設の老朽化や維持管理については、六十谷水管橋崩落(令和3年)の教訓も踏まえ、適切な維持管理や施設の更新を行う必要性を再認識しました。

一方で、人口減少社会への移行、節水型機器の普及等による給水量の減少に伴う給水収益の減少が引き続き予想されるなかで、必要な施設整備を進める必要があり、和歌山市の水道事業環境はますます厳しくなっています。

そこで、水道事業を取り巻く環境の変化や、今後の水道事業の課題に対応するため、現在の水道ビジョンの見直しを図り『和歌山市水道ビジョン2024』として改定しました。

この新しい水道ビジョンでは、六十谷水管橋崩落の教訓を踏まえ、北部地域を含めた市内全域の安定供給及び水道管路をはじめとする水道施設の老朽化・耐震対策など、水道施設全体の強靱化が最重要であると考え、施設更新のペースアップなどの取組を示しています。

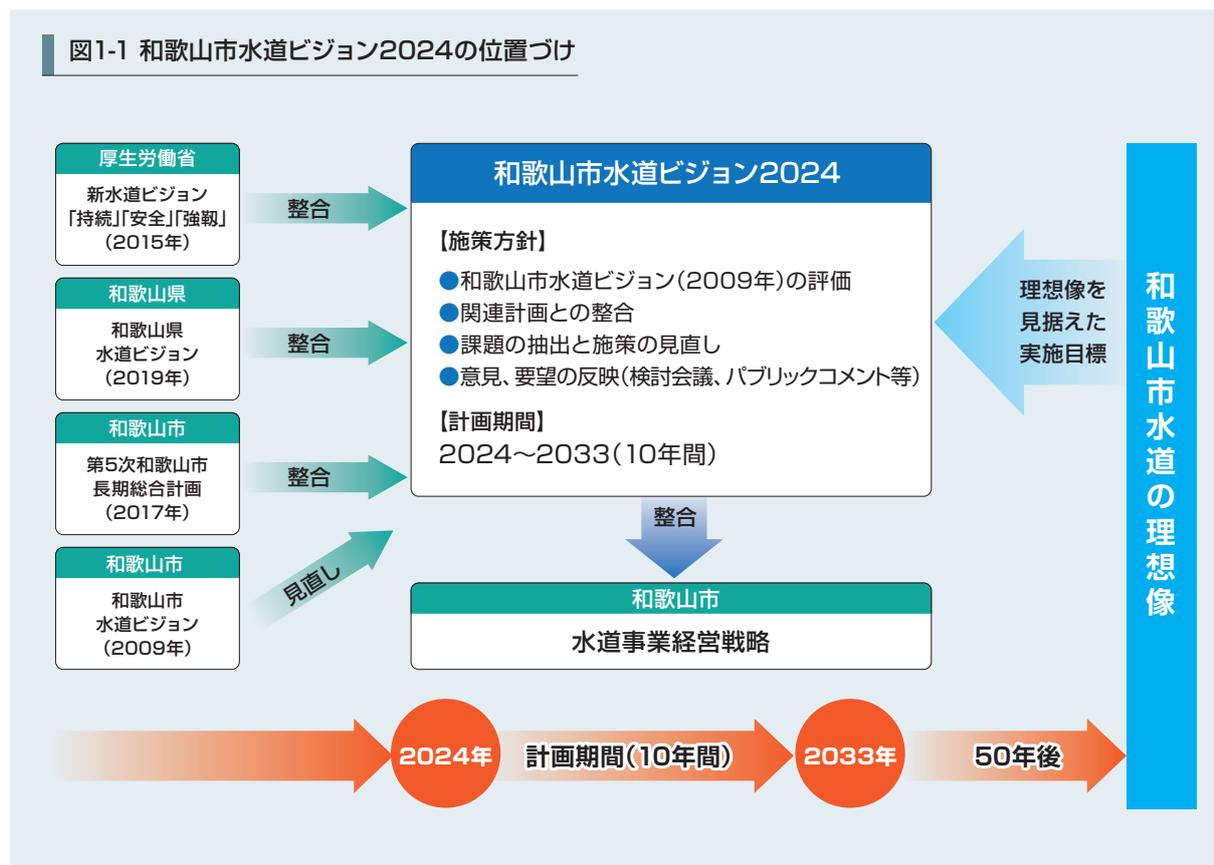
今後は、新たな水道ビジョンをもとに、お客さまのニーズに対応した、50年後も信頼される水道を目指して事業を推進していきます。



1-2 位置づけ

「和歌山市水道ビジョン2024」は、国の新水道ビジョン、和歌山県の水道ビジョン、並びに「第5次和歌山市長期総合計画」と整合を図りつつ、将来を見据えた本市水道事業の理想像と進むべき方向性を示したものです。

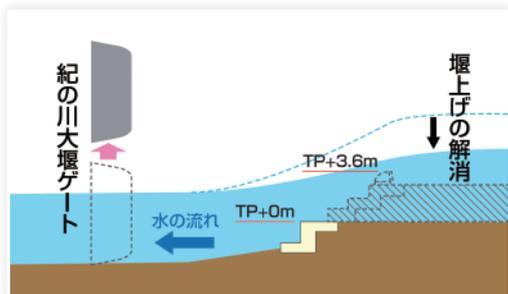
平成20年度に策定した「和歌山市水道ビジョン」を見直し、本市の水道が目指す50年後の理想像を見据え、その実現に向けた今後の10年間に実施する施策を示すものです。



和歌山市の豆知識

紀の川大堰について

紀の川大堰は農業用取水堰である新六箇井堰にかわり、紀の川の治水、利水、環境維持を目的に建設されました。(平成15年完成)



▨の部分 は撤去(標高0mから標高3.6mの部分)
 □の部分 は川の中に残された部分



治水

たくさんの水が流れて
きても安全です

新六箇井堰(固定堰)にかわり、紀の川大堰はすべての堰(ゲート)を引き上げることができるので、水位の上昇が解消され、安全に流せるようになりました。

令和5年度には、川の中に残された堰の部分的な切り欠きが事業化されました。これにより、右岸への偏流が解消され、右岸側水衝部の安全度が向上します。

利水

安定した取水を
実現

紀の川大堰でためられた水は、農業用水や水道、工業用水道として利用しています。

水の流れをきめ細かく調整できるので、安心して利用できる水の量を確保しています。満潮時には、海水が上がるのを防ぐ、潮止堰の役割も果たしています。



環境

魚道の効果で
生き物にやさしく

紀の川大堰では、生き物の移動がしやすいよう、さまざまな生き物に対応した魚の通り道(魚道)を設置しています。

魚道の整備によって、アユやウナギ、モクズガニなどのたくさんの生き物が確認されています。

